

尾崎紅葉原作『金色夜叉』に由来する
尾崎紅葉原作『金色夜叉』に由来する

新作能『豊一・花岡』

Noh *Konjiki-Yasha* or *Kan'ichi and Omiya*

宗片邦義作 © (2017.09)

By MUNAKATA Kuniyoshi

Abstract

This is the *libretto* of a new Noh play based on the novel *Konjiki-Yasha* by OZAKI Koyo (1968-1903). It was published in the *Yomiuri Shimbun* as a serial story from 1897 to 1902 and became one of the most popular stories of the Meiji period. The theme of the story was “love or wealth” in which the heroine Omiya accepts the marriage proposal from a wealthy banker’s son, neglecting her engagement to her childhood sweetheart Kan’ichi, a student of Tokyo University. Near the main street adjacent to the beach of the hot spring town of Atami one can find a sculpture of Kan’ichi and Omiya. Kan’ichi is kicking Omiya as he expresses his hatred for her while she clings to him, pleading for his forgiveness. In the present day the figures are neglected and almost forgotten as they signify the past phenomenon of domestic violence. This Noh play invites the audience to reconsider this monument and the real intention of the author in writing the story who passed away at the age of 36 without completing it as a long novel.

Keywords: 尾崎紅葉『金色夜叉』 豊一・花岡 愛と財と 熱海 新作能。
OZAKI Koyo, *Konjiki-Yasha*, Kan’ichi and Omiya, love or wealth, Atami, new Noh play.

〔構想〕 尾崎紅葉の代表作『金色夜叉』の名場面、熱海の海岸の別れのシーンと、未完に終わったため余り知られない最後のシーンを、現代語のわかり易い詞章で能風にまとめ、改めてこの作品のテーマについて考える。

（演出上のキーポイント・古典能の演奏形式にこだわらず、初心の観客にも分かり易く楽しめること。為に、新作ナレバ言葉聞き取れる様、囃子は極々抑制。特に独吟箇所に注意。） 所要時間、五〇分。

時、明治時代

所、熱海（前場）、東京（後場）

季節、正月（前場）、秋（後場）

〔あらすじ〕

前場 宮は資産家の御曹司おんざうしからの求婚に、許婚いよめけの貫一を愛しながらも、父親に従いその縁談を承諾する。貫一は真意を確かめんと熱海の海岸で宮を問い詰める。彼女は「堪忍して下さい」を繰り返す。この裏切りに貫一は「幸福は金では買えない」と彼女をなじり、取りすぎる彼女を後に行方をくらましてしまう。

後場 結婚後、心の通わぬ夫婦生活に失望した宮は本心が目覚め、貫一への想いがつのる。一方、恨みを晴らさんと高利貸しとなった貫一は、宮からの手紙も最初の一通を見て、「何を今更」と後はすべて焼き捨てる。宮は貫一の学生時代の親友荒尾の助力を得て、「今はただ赦して欲しいだけ」と貫一を訪ねる……

シテ……間貫一 はざまかんいち

高等中学校（現東京大学前期課程）学生。十四歳より

鳴澤家に寄寓。宮の婚約者。その後高利貸し。

ツレ……鳴澤宮 しんげいわみや

貫一の許嫁。その後資産家の富山唯継とみやただつぐと結婚。

間狂言……荒尾謙介 あらいけんけい

間貫一の高等中学校での親友。大学卒業後、役人として静岡に赴任。その後零落。

地謡（男三・四名）。囃子（太鼓アリ）。後見。

前場

「シテ登場音楽短ク」「シテツレ、橋掛リニ登場」

地次第「熱海の海岸散歩する。熱海の海岸散歩する金色夜叉とは誰やらん

地「ほの白き。海は縹渺限りなく。寄せては返す波の音。熱海の海

岸。打ち連れ歩む二人連れ
「囃子抑二」

「幼馴染みの許嫁。断わりなしに外出と。知れば不信は当然なり。行く先聞けば熱海温泉。思ひ寄らずや来て見れば。すでに男と共にあり。

これ詰らずにおられうか。貫一やうやく激せる心を抑へたり

「シテ・ツレ舞台二」

詞
シテ「宮さん僕は胸が一杯で」何も言ふことができぬ ツレ「堪忍して」

くださいな シテ「堪忍してとは」どういうことです。僕はここに来るまで君を「信じておった。君に限ってそういうことは」ないと。そ

れは翁さん媼さんの発意で」君もそれに納得なのか。僕はただ」それを聞きたい ツレ「堪忍して下さい」みんな私が」

地「許婚との約束を。軽く足蹴にした彼女。父母にはよろしいやうにと。

親を想ふ子の心か。玉の輿とは。親の為かわが為か

シテ「そんな」馬鹿な。いやだと君が言ひ通せば」それでこの縁談は破れ

てしまふのだ 地「堪忍しての繰り返しに。怒りを抑へる貫一の。

呼吸はやうやく乱れたり 「囃子。スグ抑二」

シテ「宮さん、お前は「よくも僕を欺いたね。婿が不足か」金持ちと縁組
したいか。この二つの外にはあるまい」言つてくれ

地「命にも換へて愛してみたるこの我を。貴女は芥の如く棄てたるよ。恨み
は骨髓に徹し。怒りは胸をつんざけり
【囃子ヤム】

シテ「ああ」宮さん。それではかうして二人が一緒に居るのも「今夜ぎり
だ。僕がお前に物を言ふのも」今夜限り。一月十七日「よく覚えてお
置き。来年の今月今夜は」どこでこの月を見るのだから

地「来年の今月今夜。再来年の今月今夜。十年後の今月今夜。一生僕は今
月今夜を忘れない。忘れるものか死んでも僕は忘れんよ

シテ「僕の」涙で。必ず月は「曇らして見せるから。月が、月が曇
つたら」宮さん。貫一はどこかで「お前を恨んで。今夜のやうに」泣い
ていると思つてくれ

地「宮は貫一に取りつきて。物狂わしう咽び入り
【以下ツレ論囃子ナシ】

ツレ「貫一さん。私も」考へたことがある。少し「辛抱していて下さいな。

お腹の中には言ひたいことが「沢山あれど。」言ひ難いことばかり。た
った一言「言ひたいのは。貴方のことは忘れはしない」生涯忘れはし
ないわ シテ「忘れんくらいなら」何故嫁に行く。二人の夫が「も
てるかい

ツレ「だから」考へることがあるの シテ「それじゃお前の心は」欲だね。」

財なのだね。人間の幸福ばかりは「決して財では買へないよ。幸福と
財とは」全く別物だよ
【囃子入ルモ抑エテ】

地「怒りを抑へて貫一は。これを最後まで続けたり。富山如き百人が。寄つ
ても僕の十分の一も愛しはできぬ。富山が財産で誇るなら。僕は彼ら
の夢想も出来ぬ。愛情で争つて見せる

シテ「宮さん」夫婦の幸福とは。全くこの「愛情の力だよ

地「愛情無しに既に夫婦はなし。当座は愛しもするだらう。だが長くは続

かない。お前の恋は直に冷まされてしまう。財というものは。人の心を感わすもの。愛してもおらん夫を持って。何を樂しみに生きる
 シテ「三年後のお前の後悔」目に見えて。可愛そうでならんから僕は「真実を語るのだ 地」危ふきを救ふが如く貫一は宮に取りつけば。宮も彼を離れじと。抱き緊めて。諸共に震えつつ

ツレ詞「ああ私は」どうしたらいいの。私が嫁ってしまったら貫一さんは「どうするの。それを聞かして」下さいな 地「この言葉に貫一は。木を裂く如く宮を突放し シテ「いよいよお前は」嫁く気だね。これまでに僕が言っても」分かってくれぬ。(ちええ。腸の腐った女。姦婦！)

地「その声とともに貫一は。脚を挙げて。宮の弱腰を。はたと蹴ったり。横様に転びし宮は。声をも立てず。苦痛を忍びて。そのまま砂上に泣伏したり シテ「貴様が」心変わりしたばかりに。貫一の男一匹は失望の極「発狂し。大事の一生を」誤るのだ。学問も何ももう「廃だ。この恨みの為に貫一は生きながら」悪魔になって・・・貴様にはもう一生「お目にはかからん

地「宮はやにわにはね起きて。貫一の脚にすがり付き。声と涙と争ひてツレ「貫一さん」待って下さい。まだ」お話が。よう貫一さん」後生だから。まだ」お話が
 シテ「何の話が」あるものか。放さないか」蹴飛ばすぞ
 ツレ「蹴られても」いいわ

地「貫一はすがる宮を振断れば。宮は無残に。伏転び 「シテ橋掛リ」
 地「まだ言ひ残せる事ありと。まだ言ひ残せる事ありと。身悶えしつつ叫

べども。宮さん！の声は遠ざかり。黒き影の。掻き消す如く。黒き影の掻き消す如く。あなたへ消えて失せたりけり

地「波は悲しく打ち寄せて。(二月十七日の)月は白く愁ひたり。宮は再び。

宮は再び。恋しき男。恋しき男貫一の。名を猶も猶も呼びいたり

「中入り

「アイ(荒尾)登場」

アイ「これは間貫一が友人にて荒尾譲介と申します。間と私は高等学校にては無

二の親友なりしが、大学進学を直前に、間が行方知れずとなり、それより五年ほど経て再会、この間に彼が、教奇なる体験をなせるを知り、物語致したく存じます。

間貫一なる青年は、幼くして母と死に別れ、十四歳にて父も失ひ、孤児となり

たれば、鳴澤隆三なる人物が、かつて貫一の父にお世話になったその恩返しにと、

貫一を我が家にひき取り育てて参った、それがそもその始まりにて、貫一は学

業優秀、品行方正にして性格穏やかなれば、隆三はわが娘宮を許嫁とし、来年貫

一めでたく大学生となれば二人を夫婦にせんと思ひ、宮もまたそれを当然と思ひ仲睦まじいく致しております。

しかるに正月三日の夜、歌留多遊びに来たる富山なる銀行家の御曹司が宮を見初め、数日後に鳴澤家に縁談を持ち込みましてございます。隆三、これ玉の輿とばかりこれを承諾、宮は貫一への想ひはあれども、親にすべてを任せたのでございます。されどその後、宮は気分がすぐれず、母に従ひ熱海に静養に出でたれば、貫一帰宅し宮の不在の理由を聞き、驚きすぐさま熱海へ行きてみれば、二人は梅園にかの男富山と共にあり。貫一その夜、彼女を海岸に呼び出だし、その真意を確認せんとした。そこでご存知熱海の海岸の場と相成り申した。一月十七日の宵のこと。

「さて、かく姿を消したる間貫一はざまかんいちに、私が再び会いましたは、それから五年後のこと。私は大学を卒業し、参事官なる役人となり静岡に赴任。されど恩人が高利貸しより借金せる連帯責任とて。それが原因もとで零落れいらく、人生の敗北者になりました。かくて無二の親友たりし間貫一に会いたく思ひ、探しに探し終に逢うてみれば何と彼自身が高利貸しになっておったのでございます。

かの国のジュリエットは、決してロミオを裏切りはしませんでした。わが間は、愛する女に裏切られ、「生きるか死ぬか」と迷った挙句、何と自らが情け知らずの無慈悲な高利貸しになっておったのでございます。

さて落ちぶれた私は、ある晩酒に酔い、人力車にぶつかってしまった。その相手が何と富山宮でございました。訊けば宮は富山との心の通わぬ結婚生活に失望し、今はひたすら貫一が恋しく、彼に逢うてただただ謝りたいと。たびたび「赦して下さい」との手紙を送れど、彼は最初の一通を読み、「何を今更」と後はすべて目も通さず焼き棄てた。

そこで私が宮のために一計を案じたのでございます。いかなることに相なりますや、とくにご覧くださいませ
(狂言座へ、又ハ下ガル)

後場

「シテ登場。囃子静カニアシラウ。ヤガテ睡眠ノ体」

地「二度は貫一。宮が手紙を読みたれど。後はすべて焚き棄てたり。また。

自ら目覚め後悔せる宮は。訪れを断われ。謝りたくも術すべはなし。されば荒尾あらお。一計を案じたり。荒尾の訪問と称すれば。部屋に通さざるを得ず

シテ「我夢むるにあらずや 「シテ睡夢ノ体」

「ヤガテ、ツレ、半幕ニ姿見セ。又ハ二ノ松マデ出ル」

地「枕まくらせる頭かしらをもたげ。耳澄ませば一

ツレ「貫一さん。貫一さん。私は貴方の手にかかって「あの世へと。さもなくば」自害して。それで貴方に赦された「つもりになって

地「救ひを求むるその声に。貫一は身も消え入るを覚えたり。そは。宮の
声ならずや ツレ「堪忍して」下さらなければ。私は生き替り死に

替りして「七生までも。お願いあなたの口から」お念仏を 地「今際

の際にただ一言。赦してやると ツレ「それで私は「潔く一命を棄
てる。ただそのお詫びがしたいばかり。堪忍して下さいまし

地「元の淨いからだに生まれ替わり。今度の世には。きっと貴方に添ひ遂
げて。この胸一杯の想ひもお聴きいただき。し残した事も十分に
貴方にも悦ばれ。この上ない一生を

ツレ「人は最期の一念で生を引くと。早く早く赦すと言って。ああもう氣
が遠くなる 「シテ、脇正面へ出ル。ヤガテ、ツレ入ル

地「貫一は。胸も張り裂けぬべく。言葉は出でず。悲しみ深まり。がばと

跳ね起き。眼前のお壕端。水は深きか。宮は何処に。宮は何処に

シテ「赦す赦す」赦したぞ。もう赦した赦した」堪忍したぞ

地「呼べど叫べど。宮の影は。宮の姿はもはや見えず

シテ「心の底から」赦したぞ 地「これほどの精神とは知らず。見殺しに
せる無念さよ

シテ「俺が誤りだ」堪忍してくれ。余りに」酷く。貴様は余りに」潔き

地「洒れたる愛慕の情はまた。泉の如く涌き起こり。その胸に漲りぬ。

この世のことはこれまでに。今度の世には。必ず必ず夫婦になつて。百歳までも添ひ遂げん

シテ「われ人の人たる道に」悔悟あり。君悔悟したるを見て「恥ずかしや地」女ひとり身を誤り。非情な稼業に狂ひたり。鍛へ直してまた来べき。

この世の無念はその時に。今覺りたり覺りたり シテ「宮」待つていろ。貫一の命も命も「貴様にやる 地」来世で二人が夫婦になる。これが結納。幾久しく受けてくれ シテ「さらば。さらば諸共に

地「諸共に。沈まんとせば。諸共に沈まんとせば。怪しや怪し。芳香鼻のうち。白百合の。白百合の人面の如。満開の花弁垂れて。肩にかかり。不思議や不思議と驚きいたれば。驚きいたれば暁の。暁の夢は破れて、夢は破れて覺めにけり。暁の夢は破れて覺めにけり

地「貫一心改まり。貫一心改まり。宮の靈魂現れたり。宮の靈魂現れたり

【宮ノ靈、白装束ニテ現レ、シテト相舞、短ク、ヤガテ消エル】

地「共に舞へりと見えたるが。共に舞へりと見えたるが。なほ美しきその姿は。間も無く消えて。その姿は。間も無く消えて失せにけり

「熱海の海岸散歩せる。金色夜叉とは誰やらん。熱海の海岸散歩せる。金色夜叉とは誰やらん

【解説】

明治期に最もひろく愛読された長編小説、尾崎紅葉作『金色夜叉』おざきこうよう こんじきやしやは、明治三〇年（一八九七）一月から六年にわたって『読売新聞』に連載され、大変な人気を博した。主人公貫一と宮との熱海の海岸での一月十七日の夜の別れのシーン¹は特に有名で、熱海はそれ以後日本の代表的な温泉地となった。

作品の主題は「愛か財か」^{かね}で、財のために愛を捨てる女への軽蔑の場面があまりに強烈に残り、有名なモニュメントも、今日ではDVに当たるとも非難され、若者たちには殆どかえりみられなくなってしまった。

しかし、作者は三十六歳で夭折しこの小説は未完に終わったが、果たしてお宮は、財に魅惑されて愛を捨てたのだったろうか。内心、両親の老後のこともあって、明治時代のこととはいえ、父親の勧めに従ったものではなかったろうか。しかし結婚後は、心の通わない夫婦生活に失望し、改めてその本心に忠実に生きようとしたのではなかったか。紅葉の真意はいずこにありしや。

この新才能は、モニュメントから受けるイメージを一新させ、あるいは誤解を解き、また新たに今日的なさまざまな問題について考えようとするものである。熱海では毎年、二人が別れた日に因んで、一月十七日に「紅葉祭」が催されているが、二〇一八（平成三十）年は、尾崎紅葉（1868 - 1903）生誕一五〇年に当たる。これを記念し、熱海市その他で公演されることを願って制作する。なお紅葉の命日は十月三〇日である。